

口語詩句賞新人賞、奨励賞選考総評

佐々木泰樹育英会の「口語詩句」募集には全国的な知名度もあり、安易に選ぶわけにはいかない。わたしは、毎月の全投稿作品のほぼ2パーセントくらいにしか「佳作」を付けていない。毎月の「佳作」選考では、氏名はもちろん、年齢も見ないで評価することにしている。その中で「佳作」が年間10篇以上もあるということだけで、優れた詩人であることを証明できたようなものだ。

「口語詩句」は5行以内35文字以内の作品というのがルールである。その小さな世界で、言葉を詩という文学に仕立てなければならない。「口語」と銘打っているのは、文学史上の作品を真似するよりも、自分自身の言葉でのひらめきや思いを書いてほしいからだと思う。すると自然に言葉は開かれ、軽くなる。それに深さが加わると、文学という名の領域になるのだろう。

実際、この制限の中でさえ、パラドックスが使用され、またナンセンスや矛盾やフュイントを操る、跳びはねるような作品に出合った衝撃は、ほんとうにうれしいものだ。それらは、新しい世代の抒情として光っていると思った。

新人賞は6名の候補の接戦になった。どれもユーモアにあふれ、新鮮さに満ちていた。審査員のひとりでも票を変えれば逆転する票差だった。最後は、春町美月（大阪府）とうすしか（東京都）の一騎打ちとなった。ユーモアという点では、うすしかかと思ったが、春町美月の作品には感動できる深さがあった。わたしは春町に入れた。

文学に携わる一人として、若い文学人の未来を応援する「口語詩句賞」の制度には感謝するばかりである。候補にまでは至らなかった投稿詩人たちにしても、一つでも「佳作」があった人は、期待されていることに自信を持って、思い切って、だけど繊細に、言葉と向き合っていてほしい。

秋亜綺羅